

に「クラブ的」空間に足を運ぶことがわかった。

渋谷がギャルの聖地として、ギャルの高密度空間であり続ける限り、ギャルは誕生し続けるであろう。また、彼女たちは、「クラブ的」空間で見た人や雰囲気、得られた感覚を常に持っていたがためにギャルファッションで身を包み、その力を最大限に与える本場の服を求めて、同時に、日常からの離脱を求めて渋谷に向かうのである。

村上春樹の小説にみる「ホテル」の意味の多義性

山口 寛子

ホテルとはどういう空間だろうか。筆者は最近の雑誌や映画・文学作品にホテルが都市空間の中で「泊まる空間」以上の意味があるのではないかと感じた。

本論では村上春樹の小説の中のホテルを読み解いていくことによって都市空間でのホテルの多義性を解明する

具体的には『羊をめぐる冒険』の「いるかホテル」、『ダンス・ダンス・ダンス』の「ドルフィン・ホテル」と「いるかホテル」、『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」を考察する。

村上春樹は川本（2006/1980）によると「都市の感覚」を持った作家である。作風では現実世界と主人公の内的空間を行き来する物語が多い。多くの論評がかかっている。

まず『羊をめぐる冒険』であるが、ここでは古くさいホテル「いるかホテル」が、主人公が現実世界と異界を行き来する際の通過点になっていることをあげる。次に『羊をめぐる冒険』の続編である『ダンス・ダンス・ダンス』では現実世界では「いるかホテル」が建っていた場所に高級ホテル「ドルフィン・ホテル」がここでは「ドルフィン・ホテル」がそして、ホテルは、誰もが通りすぎる場

所であることから、「いるかホテル」を「僕」が孤独で空虚であることをあらわしている。

『ねじまき鳥クロニクル』の「208号室」においては、「208号室」のあるホテルがだんだんと変容していく様子を見ることによって、ホテルがだんだんと「おぞましい空間」になっていく様子を指摘する。

このように、ホテルにいろいろな意味が付与されるのは、ホテルが「限定的に」居住する空間だからである。家とは違う「ホテル」は完全にすむ空間にはなり得ないことから、意味が浮遊し、多くの意味を含ませることのできる空間となるのである。

観光スポットの個人的な聖地化： 東京タワーを例に

山崎 百合

人間は場所に意味を付与しながら生きていられると言われている。このような「場所への意味づけ」はどのように行われていくのだろうか。本稿では、小説『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』（リリー・フランキー著）を題材に見ていく。一般的には観光スポットとして消費される東京タワーが、個人的にはかけがえのない「聖地」という意味を持つようになるのではないかと、という仮説を立てて検証した。

先行研究では、第2章で、意味づけにおいて「個人的な経験」が最も重要な要素であることを指摘した。また、「聖地」が持つ意味についても調べ、宗教的意味がない場所も聖地となりうるのではないかと可能性を示した。第3章では、塔が「聖」の象徴性や「高所衝動」という精神作用を持つことについて紹介した。第4章では、小説の舞台となる東京タワーについて論じ、一般的に観光スポットとしての意味を持つことを確認した。

第5章では実際に小説の読み取りを行った。幼少の頃のボク（リリー・フランキー）

は母子家庭に育ち、自分の居場所が持てず、精神的にも不安定であった。そんな中でオカン（母親）だけがよりどころであり、ボクの心の聖地であった。ボクは東京に来てしばらく墮落した最低の生活を送っていたが、その場面では東京タワーは登場しない。このことから、東京タワーが「高所衝動」の対象になっていることを読み取った。

小説の後半、東京タワーは、オカンの闘病生活をずっと見つめる存在として描かれている。東京の中心にまっすぐ突き刺さっているという強さと、ひとりぼっちで東京を眺めているという孤独。この「強さ」と「孤独」がボクの心の聖地であるオカンの存在と重なり、東京タワーにも聖地という意味を見出していった。

場所への意味づけは個人的な経験と先見的観念によって行われる。小説で描かれたオカンとの経験に、東京タワーに対する一般的な見方・塔の象徴性といった要素が関連しあって、東京タワーを個人的な聖地にしたと結論付けた。

日常に潜む、女性を制約する「恐怖の空間」について

山本 理恵

この論文では、女性が恐怖を感じる空間が現れるときの共通した条件を導き出し、それにより女性がどのように生活を拘束されているのかを検証する。恐怖というと警戒心や不安が中心となるが、今回は解釈を広くし、場所を感じる嫌悪感や違和感などのマイナスな感情全てを恐怖に含め、それらが基になって作り出される空間を「恐怖の空間」と設定する。具体的には、「帰り道」と「居住空間」について調査する。多くの人々と触れ合う「公」の空間から、個人的な「私」の空間に戻るときにこそ、その人自身から発信される感覚や感情が強く働くのではないかと考えた

ためである。主な調査はインタビューと実地調査によって行った。個人が特定されやすい情報を扱うことになるため、情報の取り扱い方には留意している。1度目のインタビューの質問は、「恐怖の空間」ができる条件が具体的なものなのか、心理的なものなのか、様々な可能性を模索できるように設定した。そして実地調査を実施し、その調査を基に、2度目のインタビューでは調査対象者と調査者との感覚の差異や、調査対象者の過去がどのように今に関係しているのかについて聞き、「恐怖の空間」の条件を導き出した。「恐怖の空間」にはいくつか特徴があり、出来上がるには条件があることが分かった。それは家を探す際の前提条件であったり、想像力、暗さ、恐怖の現実味、出身地での環境など様々である。それは絶対的なものというより、それぞれ人に左右されるものである。例えば同じ条件でも、人によっては「恐怖の空間」の条件になることもあれば、逆に安心する条件になることがある。「恐怖の空間」が現実には及ぼす影響には強弱があるものの、女性は常に他人からの視線を意識し、どのようにしたら安全に生活できるのかを考え、行動している。女性は、「恐怖の空間」があることで日常生活を制約されているのである。

商店街の賑わい分析：
砂町銀座商店街を事例に

吉村 頼子

砂町銀座商店街は、マスコミで頻繁に賑わいぶりが取り上げられている。本研究では、砂町銀座商店街がどのようにして賑わっているのか、そしてなぜマスコミから注目されるようになったのか、この2点について分析を行った。文献調査や聞き取り調査から、賑わっている要因を検討した結果、先行研究には書かれていなかった賑わいの要因として、交通の不便さ、下町情緒、道幅の狭さ、チェーン